

これから森で出会う同種の鳥たちにつまはじきにさ
れやしないだろうか。

率直に心配を伝えると、旅鳥は恥ずかしそうに俯い
た。

「人だった頃から、得意じゃなくて」

「もし、余計なことではなかったら、歌い方を教えるよ」
すると旅鳥は、すくっとまっすぐに私を見た。そし
て言った。

「それなら、お礼に、僕の知っているわらべ歌をみんな
お教えしましょう」

その提案を聞いて、ついさっきの出来事が脳裏をよ
ぎった。

……この町外れのあばら家へ迷いこんだ子供を人里へ
送る道、一緒にうたってとねだられて、私はひとつも
人の歌を知らなかったのだ……

「……見ていたの？」

「見えてしまいました」

2

だから、旅鳥は来てくれたのだ。
胸に、あたたかいものが広がった。

「人の世に、なかなか馴染めなくてね」

「僕もです。鳥の世に馴染めない」

それから私たちはミントティーで喉を潤し、時を惜
しんで、夜通し歌を交換しあった。

ふと壁を見ると、旅鳥の影はひとの姿になり、私の
影は鳥になっていた。どこともわからない遠くでうね
りをあげる嵐のまぼろしを感じて、私の影がふるえた。
朝が光を突きつけ、風は急かすように窓を叩いた。

「またきつと寄ってね」

「どうか元気で」

旅鳥が力強く羽ばたき、その藍とも群青ともつかない
宵空色の光沢が、私の杞憂を吹き払った。

そう、私たちはいつでも、ただ羽ばたき、歌うだけ
でいい。それだけでいいのだった。

3



旅の鳥の影はひとの姿になり、私の影は鳥になっていた。
どこともわからない遠くでうねりをあげる嵐のまぼろしを感じて、私の影がふるえた。
朝が光を突きつけ、風は急かすように窓を叩いた。

ペーパーウェル第八回『緑』

